

東京バッハ合唱団 月報

[第527号] 2006年5月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel: 03-3290-5731 Fax: 03-3290-5732
E-mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.527
May 2006

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

「ああ 感謝せん 神に!」BWV192、東京バッハ合唱団の演奏に感銘

ボンヘッファー生誕 100 周年記念大会

小海 基

(日本基督教団荻窪教会牧師・日本ボンヘッファー研究会員)

2005年から06年にかけての1年間は、私たち日本ボンヘッファー研究会にとってとても重要な年でした。05年4月9日がナチ政権によって強制収容所で絞首刑に処せられたディートリヒ・ボンヘッファー牧師(1906-45)の没後60年、06年2月4日が生誕100年という年であったからです。世界中でいろいろな記念集會がもたれました。

日本は第二次世界大戦でドイツと軍事同盟を結んだ国であり、ドイツの教会以上に日本の教会は戦争協力をになった歴史を持ちました。だからこそ戦後の日本の教会は教派を超えて、ドイツの告白教会が時のナチ政権に抵抗しつづけた歴史や、カール・バルトたちが中心になって告白した「バルメン宣言」、戦後の「罪責告白」、ボンヘッファー牧師たちの戦いと神学といったものを精力的に学びつづけてきました。ひとしおの思いがあるのです。世界の中でドイツ語、英語につづいて最も多くのボンヘッファーの著作が訳され読まれている国がこの日本なのです。

3月21日(春分の日)午後3時から信濃町教会で行なわれた日本バルト協会と日本ボンヘッファー研究会主催の「ボンヘッファー生誕100周年記念大会」は、そういう思いで全国から集まった230名以上の人々にあふれかえった大変大きな会となりました。この会では、ドイツから『新ボンヘッファー全集』の中心になったイルゼ・テート博士とディルク・シュルツ牧師という2人の研究者を、仙台から宮田光雄東北大学名誉教授を招き、感銘深い講演がなされました。諸講演はこれから出される「福音と世界」6月号誌上に採録されますが、これらの講演にひととき感銘深い印象を添えたのが、開会礼拝のなかで捧げられた東京バッハ合唱団によるバッハのカンタータ第192番《ああ感謝せん神に》と、参加者全員で歌ったボンヘッファー牧師の詩による讃美歌《善き力にわれ囲まれ》(これは彼が獄中で書いたもので、『讃美歌21』469とバプテスト連盟の『新生讃美歌』73の2つの版によって歌われました)同じく《キリスト者と異邦人》(「なやみのさなか神に助け求め」、これは大村恵美子先生の訳!)でした。

ボンヘッファーの研究会は世界的な広がりを持ち、各国で大会が開かれるのですが、その度に私たち日本からの参加者が圧倒されるのがボンヘッファーにちなんだ演奏会や

演劇、映画の上演などがなされる事です。ボンヘッファーは39歳という若さで亡くなったのですが、単なる神学者というだけではなく、劇作品や小説も書き残している多彩な神学者でした。

特に音楽に関してはそもそもプロの音楽家を目指すか神学者、牧師を目指すか真剣に悩んだというほどの腕前を持っていました。ボンヘッファーの家系をたどるとそのことは納得がいきます。母方の祖母はピアニストであり、クララ・シューマンとフランツ・リストの高弟。姉の夫の父はハンガリーの作曲家でベルリン音楽大学の教授でもあり、今もCDでその作品を聴くことのできるエルンスト・フォン・ドーナニーです。ですから、今現存しているボンヘッファー家の人々も音楽界の著名人が多いのです。例えばアメリカのクリーヴランド交響楽団主席指揮者のクリストフ・ドホナーニは彼の甥で、少年時代にボンヘッファーのピアノ伴奏でフルートを吹いているという有名な写真が残されていますし、『獄中書簡』の中に出てくるディートリッヒ・ヴィルヘルム・リューディガー・ベートゲという名のもう一人の甥は(幼児洗礼に際して獄中のボンヘッファーから名前と言葉を贈られた)現在ロンドン交響楽団のヴィオラ奏者として活躍しているといった具合です。

さらに言えばボンヘッファー研究者の中にも音楽関係者が多いのです。『ボンヘッファー獄中詩編』という書物を書いた東ドイツ(当時)のユルゲン・ヘンキース教授は、ドイツの新讃美歌集E.K.Dの編集者としてとくに諸外国の讃美歌をドイツ語に訳して収める部門の責任を担いましたし、日本基督教団の『讃美歌21』編集委員にも、バプテスト連盟の『新生讃美歌』編集委員にも我が日本ボンヘッファー研究会員がいて大きく貢献しています。そしていうまでもなく東京バッハ合唱団の大村恵美子先生も研究会のメンバーとして大活躍しておられます。

ドイツを東西に分断する壁が崩され統一がなされたとき、J.S.バッハゆかりのライプツィヒ聖トマス教会やドレスデンの聖十字架教会、指揮者のクルト・マズアといった人たちが大きな影響力をもったことは有名な話です。神学や音楽は一見この世の政治とまったく無関係な分野のこのように見えますが、ボンヘッファーの神学やバッハの音楽

の深い水脈に連なる人々が反ナチ政権抵抗運動や戦後の東西冷戦の克服に大きな影響を与えているのです。直接的にこうした運動の精神的支柱を担っているのです。最近でも、今度のローマ教皇ベネディクト 16 世自身が、これまで少年時代にヒトラーユーゲントであったことばかりマスコミで報道されてきましたが、それだけではなく、少年時代をバッハの合唱団として定評のあるグループの 1 つ、ドイツのレーゲンスブルク大聖堂の聖歌隊員として育ち、お兄さんはその指揮者として生涯を全うした人であることを私は就任祝賀コンサートの DVD で知らされびっくりしました。

ボンヘッファーの生誕 100 年を祝うのに東京バッハ合唱団の皆さんがバッハのカンタータ 192 番を選ばれたのは、本当にふさわしい選択であったと思います。単に大会に花を添えるというだけの華々しい作品というのではなく、歌詞の内容がとても印象的に響き合っていたと思います。コラール自体がドイツ三十年戦争(1618-48)の終結した際に歌われた平和のコラール(Martin Rinckart “Nun danket alle Gott” 1636)として有名ですし、また元になる聖書テキスト(旧約外典シラ書 50,24-26)も神の業のために選ばれ、立てられた苦難の預言者にちなんだもので、そのように平和を祈り、苦難の伴うキリストへの服従の道に生涯を捧げたボンヘッファーと重ねながら、今の私たちに与えられた使命を思う大会にふさわしいものだとしみじみと感じました。

ふだんは大村訳の日本語でカンタータを歌われている東京バッハ合唱団のことですから当然日本語で歌うのかと私は思っていたのですが、ドイツ語で歌われたのにはびっくりしました。遠路のメインゲストへのご配慮です。私は開会礼拝の司式者でしたので良く見えたのですが、最前列にすわるドイツからの 2 人のゲストが、憑かれたように聴き入っていたのがとても印象的でした。また 3 曲歌われたボンヘッファーの獄中詩による讃美歌は村上伸先生の説教や宮田光雄先生の講演でも触れられ、説教者も講演者も感極まって涙ぐむという場面もあって、音楽の力はすごいものだと感じました。

ボンヘッファー神学における音楽の重要性については、大村恵美子先生の研究や CD が世界的にも注目を集めています。それらは日本のボンヘッファー研究の大きな貢献のひとつであると思っています。彼の『獄中書簡』を読むと、ボンヘッファーは差し入れられた「ローズンゲン」と共に「マタイ受難曲」のフルスコアを読みながら、バッハやそこに出てくるパウル・ゲルハルトの讃美歌に支えられて最期の日々をすごしていたことが良く分かります。聖書から真実な神学や音楽、歌が生み出され、あのような暗闇の時代にもかかわらず希望の言葉が生まれ、力を持っていったということを知られます。そうしたボンヘッファーの一面を知らせてくださった東京バッハ合唱団の名演奏でした。

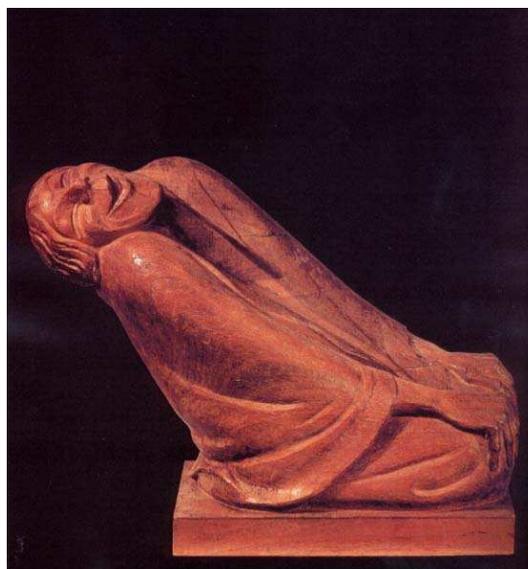
今年はまだひとつ、エルンスト・バルラッハ(1870-1938)の彫刻展が東京芸大で開催されています。ご覧になりまし

たか? ボンヘッファーと同時代の彫刻家です。ナチ政権から退廃美術の烙印を押され、破壊されそうになった彼の彫刻の数々が来日しているのです。その中で私にとってはバルラッハの最晩年の作品がとくに印象的でした。「歌う男」と「笑う老女」です。バルラッハの作品は次々と破壊され、生活も追い詰められて敗戦前に彼は亡くなるわけですが、いちばん悲惨な時代にいちばん明るい作品を彼は残しているのです。時代の暗闇に巻き込まれず、嵐の只中で次の時代の希望を指し示す力を、私はボンヘッファーの言葉や、バッハの音楽、バルラッハの彫刻からいつも感じています。そうした輝きを、東京バッハ合唱団の皆さんの歌声は、確かに響かせていました。感謝です。



エルンスト・バルラッハ「歌う男」1928年

エルンスト・バルラッハ「笑う老女」1937年



受難曲と美術作品

キリストの捕縛

白木 博也

オリーブ山が突然、騒乱の場となる。現れた兵士たちの前で、キリストに裏切りの接吻をかわすユダ。マルコの耳を削ぐペテロ。



ドッチョ・ディ・ボンセーニャ (1255/60-1315/18)
イタリア・シエナ, ドゥオモ付属美術館「マエスタ」より



ジョット・ディ・ボンドネ (1266-1337)
イタリア・パドバ, スクロヴェーニ聖堂

《マタイ受難曲》: 第26曲 エヴァンゲリスタ(T)/イエス(B)

『マタイによる福音書』: 第26章 47-56節

2006 年後半 2007 年 3 月の活動予定

団員総会

6月24日(土) 15:30 - 17:30

会場: 世田谷中央教会

合唱団の活動年度は、毎年7月1日(創立記念日)から翌年6月末日までとし、6月最終の練習日に団員総会が開かれます。年間の事業と決算の報告があり、新年度の活動が討議される、団のもっとも重要な会議です。

ことに今年度は、2007年3月の《マタイ受難曲》演奏会にむけて、多くの新入団員が加わりつつある現状ですので、新しい方々も共に合唱団の実情を知っていただくよい機会となります。ぜひ出席してください。

創立記念懇親会とバザー

【本紙4面にご案内】

6月26日(月) 18:30-20:30

会場: 目白聖公会

参加費: 2000円(軽食代・記念品代を含む)

団友や後援会員、ご支援の皆様ひろく呼びかけて、団員ともども一堂に会し、親しく交流をたのしむ会です。

今年は久しぶりに、合唱団の経常会計と演奏会会計、後援会の会計と、すべてにおいて赤字が克服され、来春の《マタイ》(創立45周年記念)にそなえて財政的にも憂慮のない態勢をととのえているところです。一角に併設されるバザーコーナーも定着してきました。ご参加、献品等、みなさまのご協力をお待ち申し上げます。

なお、ご参加の記念品として、これまで数年にわたって月報に逐次連載してきた《マタイ受難曲》関連の記事を、冊子にまとめてお渡しする予定です。来春の演奏のために、くりかえし参考に読まれて、役立てていただきたいと思えます。

《マタイ受難曲》夏期特別集中練習

8月5, 12, 19, 26日(いずれも土) 13:00 - 19:00

会場: 世田谷中央教会

今年は、野尻湖での合宿と神山教会コンサートとを返上して、8月中の全4週の土曜日を《マタイ》の集中練習に充てることにしました。遠隔にお住まいなどで、なかなか練習に通えない方々も、どうぞこの機会をご利用ください。

なお、8月中は月曜の練習は休会となります。

クリスマス祝会

12月18日(月) 18:30-20:30

会場: 目白聖公会

今年は、やはり例外的に12月の定期演奏会がありません。その代わり、16日(土)まで《マタイ》の練習をしっかりと続けます。

年の終わりに、もろもろの感謝をこめ、新年の祝福をいのりながら、クリスマス会で活動をしめくくります。最近、後援会員・団友の方々のご参加も多くなり、うれしく思っています。

ご出席くださって、来春早々の《マタイ》上演へのお励ましをいただければ、しあわせです。

特別演奏会《マタイ受難曲》抜粋

2007年3月3日(土) 15:30 - 17:30

会場：世田谷中央教会

テノール(エヴァンゲリスト): 鳥海 寮

聖書朗読：加藤剛男

合唱：東京バツハ合唱団 + 児童合唱団

ピアノ：内山亜希

指揮：大村恵美子

創立45周年記念・第100回定期演奏会《マタイ受難曲》

2007年3月21日(火・祝日) 17:00 開演

会場：杉並公会堂(2006年6月新装開館、JR荻窪駅下車)

ソプラノ：光野孝子

アルト：佐々木まり子

テノール(エヴァンゲリスト): 鏡 貴之

テノール：佐伯雅巳

バス：渡邊 明

バス：宇佐美桂一

合唱：東京バツハ合唱団 + 児童合唱団

管弦楽：東京カンタータ室内管弦楽団

指揮：大村恵美子

《マタイ受難曲》の上演会場となる杉並公会堂は、本年6月オープン予定のシューボックス型クラシック音楽専用ホール。どんな響きになるのか楽しみです。

杉並公会堂(1190席)



創立44周年記念 手づくり懇親会とバザーのご案内

【前ページのスケジュール欄もご覧ください】

6月26日(月) 18:30-20:30

会場：目白聖公会

参加費：2000円(軽食代・記念品代を含む。当日、会場にてお支払いください)

毎年の創立記念パーティを、これまではレストランなどの一室を借りきってお祝いしていましたが、昨年、普段の練習に使っている会場で、団員の方々の持ち寄った食べ物などによる手づくりの懇親会を試みたら、お客様がたにはとても喜んでいただいたようです。

そこで、今年も同じ趣向でいたします。

ご友人もお誘い合わせで、ぜひご参加ください。食事の準備等のため、なるべくご予約ください(事務局)。

会場での演奏やスピーチなど、大歓迎。事前にお知らせください。

当日のバザー用の提供品をお送りください。前日まで事務局あてにお送りいただければ幸いです。